

Plan Do See

『真剣勝負』

さみさと小学校 校長 澤木 昇

子どもが下校してから30分以内に学校で起きた問題を親に伝えないと間違っただけ情報が伝わり、親の誤解を解くことが困難になるといった事態に陥ることがあるという。また、問題を起こした子どもを納得させてから帰さないと、子どもの言葉だけを信じる親は、憤慨して学校や担任に電話をしてくる。もっと感情を激した親は、地教委を通り越し、県教委さらには警察に訴えるケースもあるという。危機管理の側面からも頭が痛くなる昨今である。



さて、ここで、実際にあった事例を話そう。子どものズックにマジックでいたずらされる事件が起きた。小学校ではよくあるいたずらだ。いたずらをした子を探したが見つからず、担任は困った末、親と相談し、下校する際に担任が下足を預かり、安全と思われる場所にしまうことにした。それでしばらくは問題が起きなかった。ほっとしていた矢先、そのズックにこれまで以上のひどいいたずらがされた。親の怒りは大変なもので、担任は釈明のため数度家庭訪問を繰り返した。緊急に生徒指導対策会議を開き、善後策を相談した。やはりいたずらをした子どもを特定しないと事件の解決につながらないことから、まずは情報集めをすることにした。数人の教師で行った聞き取りから、時々その近辺にいる子どもの名前が浮かび上がった。ことは人権にかかわることなので慎重な対応が必要であるという認識で、該当児童に聞き取りをした。児童は、「絶対やっていない」と言い張った。その子にほぼ間違いはないだろうと感じた担任は、この経緯を保護者に伝え、家でもそっと聞いてほしいと依頼した。父親からの連絡では、「本人は絶対やっていない」というので、子どもの言うことを信じるということだった。担任も周りの教員も釈然としない状況下で解決の糸口は途絶えてしまった。その後、何ら事件は起きなかった。が、しばらくして、給食時におつゆに消しゴムが投げ入れられる事件が起こった。何人かの子どもが様子を目撃していた。放課後、担任はあなたがやったのではとたずねたが、子どもは、「また俺を犯人扱いするのか」「俺は絶対してない」と言い張った。目撃した児童がいることを伝えても態度はかたくなだった。担任は親に電話をかけて、子どもに事件の真相をたずねてもらえないかと依頼した。「また、子どもを犯人扱いするのか」という激しい怒りの声が電話から聞こえてきたが、担任は事実を確かめたいからと言うことと今回は数人の目撃児童がいることも伝えて頼んだ。しばらくして、子どもは絶対してないと言っているという答えが父親の怒りの声とともに担任に電話で伝えられた。担任はどっと疲れにおそわれるとともに絶望感に押しつぶされそうになった。同僚から慰めの言葉をかけられても問題が解決されないジレンマに焦りに似たものを感じた。それから2時間ほどして突然電話がかかってきた。父親からだった。再度問いただしてみたら自分がやったことを認めたということだった。電話の向こうから父親が平謝りに何度も謝る姿が目に見えるようだったという。犯人探しは学校教育の仕事の範疇ではないが、時には、犯人を捜し、特定できないと、その子の更正につながる指導は困難になる。今見つけて正せなければやがて平気で人に迷惑をかける問題のある大人になってしまう。「罪を憎んで人を憎まず」という言葉が喧伝されてきたが、子どもを信じてやる大人の熱い思いやりの心が、きっとその子を立ち直らせることにつながるだろう。これこそ教育の醍醐味である。担任は日々子どもと真剣勝負をしている。そんな担任にエールを送る。

特別支援教育に関わる研修を終えて あさひ野小学校 大森祐子

2か月間、富山県総合教育センターで、通常の学級における発達障害のある子どもへの支援の在り方について特別支援教育コーディネーターの役割を通して考えてきました。

通常の学級においても特別支援教育を行うことの大切さは、誰もが理解し、一生懸命取り組んでもいます。しかし、通常の学級で一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行うということは実に難しく、大きな課題として先生方を苦しめているように感じます。支援が必要な子どもたちが生き生きと学ぶ環境を整えるにはどうしたらよいのか、コーディネーターとして何をしたらよいのか、もやもやとした気持ちを抱えていました。

研修では、多くの文献を読んだり、講義を聴いたりして、コーディネーターの役目、通常の学級での特別支援教育の在り方について深く考えることができたように思います。学校を離れてこれまでの取組を振り返り整理してみると、見えていなかったことが見えてきました。言葉にならなかったもやもやが言葉になり、何ができていなかったのか、何が必要だったのかということを考えることができました。そして、今後、コーディネーターとして大切にしていかなければならないことが少し分かったように思います。

やはり、通常の学級における特別支援教育は何も特別なことをするのではなく、毎日私たちが当たり前のように取り組んでいることや、私たちがこれまで大切にしてきたことの中にあるのだと強く思いました。適切な実態把握が行われなままの「集団の中での個別の支援」は、先生方にとって成果も見えにくく、負担感が大きいものです。しかし、個だけでなく全体に目を向け、学級運営と授業の中でできることを探していくと考えればどうでしょう。どの子どもにも必要な支援であると捉えれば、負担感が少なくなり取り組みやすくなるのではないのでしょうか。大事なことは、学級運営と授業の中にたくさんあると思うのです。

今後は、コーディネーターの役目として「特別な支援」と捉えるのではなく、自分たちの取組から効果的な支援を探し、意識して取り組んでいけたらと思っています。



『教育雑感』障害児教育研修会に参加して さみさと小学校 教諭 石浦嘉寛

先日、障害児教育の研修会で、最近話題になっているインクルーシブ教育についての話を聞きました。インクルーシブ教育システムとは、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な『合理的配慮』が提供される等が必要とされている。」とあります。

研修会の司会者が、「支援の意味は、個別に対して教育効果を上げるための配慮をすることですが、福祉を含めて個人をいじり回すことにもつながる危険性があります。たとえば、リハビリといって毎日ただ歩かせたり、漢字を覚えるためと、ただただ多くの漢字を書くことを強いることもあります。支援という言葉は心地よい響きではあるけれど、場合によってはじめとらえられるため、気をつける必要があります。インクルーシブ教育は、もっとも差別の少ない教育です。実現のために取り組みましょう。」と言われたのが印象的でした。

沖縄県では、支援を必要とする子どもがたくさん増えたため、普通の高校の中に支援学校の分教室を設けたそうです。同じ建物の中で、障害児と健常児が廊下ですれ違ったり、体育館で一緒に遊んだりすることによって、ある程度のつき合いができていそうです。先生たちの障害児に対する見方、態度対応が一番変わったと言われました。それは、きっと障害児と健常児とのほどよい距離感なのではないかと思いました。普通学校の中でも子どもたち同士の距離が近すぎればけんかにもなります。同じ建物の中で異なったカリキュラムを受けるといふほんのわずかにずれている距離感が互いの関係をうまく調整しているのではないかと思いました。

これからの学校教育の在り方はこれから大きな変化を迎えそうです。どのように取り組んでいけばよいのか試行錯誤しながら進んでいくことになると思いますが、その取組が楽しみでなりません。



学ぶべきことは 目の前の子どもから あさひ野小学校 大藏慶子

10月から12月までの3か月間、富山大学人間発達科学部の松本教授のもとでたくさんのごとを勉強させていただきました。松本先生は、厳しくかつ温かく指導してくださいました。

心に残っている言葉は、『学ぶべきことは、目の前の子どもからである』という言葉です。学習の主体は子どもなのだから、「子どもはどう受けとめているか」を感じ、「それに対して、教師は適切に援助してやれるのか」を考え、しかも「臨機応変に援助する」ことが大切だということです。また、私たちは子どもに対して教科の内容を教えようとしてしまうが、教科を教えようとするのではなく、「子どもを教育すること」が先であり、「子どもを教育すること」の中にたまたま教科があるということです。教科の学習はあくまでも手段なのです。



教師にとって、一番大切なことは「聴く耳」をもつことだと思いました。子ども一人一人の話をきちんと聴くこと、子どものつぶやきを聴きとることが大切だということです。つぶやきは、子どもの素直な生きた言葉であり、つぶやきと発言のリズミカルな流れの中で授業が展開されていくからです。また、子どもが何か話しかけてきたとき、すぐに「どうして？」と聞き返さないで、まずは話をじっくり聞き、話の内容だけでなく、その子どもがどのような思いでそのことを教師に言いきたかを考えることが大切だということも教わりました。さらに教師は板書や精選された発問を使って、子どもが「どうして？」「なんで？」と理由を尋ねたり、「だってね・・・。」と思いを答えたりするような子ども同士のつながりをつくり出すことも大切なのだと教えていただきました。

松本先生のような教師にはなれませんが、少しでも近づきたいと思う毎日でした。そのため、日々の研修が大切であり、一つ一つの授業を大切にしていかななくてはならないと思いました。約30年ぶりの学生生活の中で、改めて自分の教育観を見直したり、これからの自分の教育方針を考えたりすることができたことをうれしく思いました。

ICTがやってくる (ICT研究会参加報告)

朝日町教育センター所員

文部科学省主催のICT研究発表会(大阪)に行ってきました。電子黒板、デジタル教科書、タブレット等がいよいよ日常の授業のツールになる「明日の教室」にワクワクすると同時に、混乱する教室の未来映像も少しばかり思い描きました。

ICTの利用によって、平均点は3点上がると言われます。わずかですが、確かな差です。先生がICTを使うか使わないかで、学習者の理解度をそこまで決定づけてしまうのでしょうか。

先日、富山大学で「わかりやすい授業づくりのためのデジタル教科書活用」と題したフォーラムに参加しました。ICT教育の日本のトップである堀田龍也(玉川大学教職員大学院)先生の講演と3人の先生のデジタル教科書を使った模擬授業の参観が目的でした。どの先生の授業も大型の電子黒板に投影されたデジタル教科書を使い、参観者の目と集中を少しもそらせませんでした。しかし、ICTを駆使しての「わかりやすい授業」

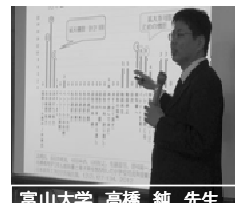
の差は、もっと根本的なことでした。

それは、教師の発問であって、指示の意味であり、先生の発声や表情でもあり、そもそもの授業構想と展開でした。考えてみれば当然ですね。

堀田先生は「ICTで今までのこと(準備)がやりやすくなるだけ。」と言われます。たしかに実物投影機を教室に1台設置するだけで、学びの空間はまるで別物になります。

ICTを利用するから授業がわかるのではなく子どもたちにとって、どうしたらわかりやすい授業になるかに悩む先生が、ICTも利用して結果的にわかりやすい授業を実現されている。そう実感しました。「授業の最大のFactor(要因)はいつの時代も教師」【堀田先生】

朝日町にもそろそろICTの東風が吹きそうです。



富山大学 高橋 純 先生

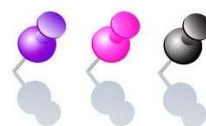
今年度の研究から『学力向上市町村教育委員会プラン研究事業』指定校

「とやま型学力向上プログラム」と校内研修 朝日中学校 研究主任 楽山 進

平成23年度に引き続き、本年度も「とやま型学力向上プログラム拠点校」として、「主体的に学び、共に高め合おうとする生徒の育成」を目指して研修を進めてきた。今年度の研修内容の特色としては、次のものが挙げられる。

＜年度当初に全体研修会で共通理解を図り、年間計画に位置付けたもの＞

- 「学び合い研究」「体験研究」「特別活動研究」3部会による研修組織
- 部会研修による授業案の検討と実践
- 学習指導案の作成と日常的な互見授業の実施
- 講師招聘による研修会



＜県総合教育センターでの研修内容を受け、インターバル研修として実施したもの＞

- フリーカードを用いた授業リフレクションの実施
- 「課題カード」と「確認カード」の活用（ねらいの明確化と成果の確認）

以上の研修を振り返り、アンケートで寄せられた成果には、3部会による研究組織の置と実践については、「話し合いの型や視覚教材の提示の仕方など他教科でも参考にできことがたくさんあった。今後も教科を超えた情報の交換や共有が活発に行われたらよい。といったものや、フリーカードを用いた授業リフレクションについては、「時系列でカードを整理し、協議する手法は初めての経験であったが比較的取り組みやすかった。」という声も聞かれ、実際に従来の事後研修会よりも参加者の自発的な発言が多く、協議にも高まりが見られるようになった。また、20代から30代の若手教員がリフレクションの進行役を担当することによって、職員一人一人の研修への参加意識が高まり研修会全体の活性化を図ることができた。



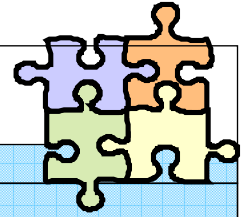
このような多くの成果が得られたのは、職員一人一人の研修への協力的な取組姿勢によるところが大きい。新しく提案された研修方法を肯定的に受け入れ、生徒の成長と学力向上を願って、日々の実践に生かそうとする取組は今日も続けられている。



今年度より「朝日町研究主任会」が始まりました。総合教育センターが勧める「授業リフレクション」を小中一斉に導入していただき、より効果的な授業研究の手法について話し合うよい機会となりました。従来通りの授業研究から「変える」ことが難しいという声がよく聞かれます。3校とも一度に進めてくださり、同じ方向を見ての議論ができました。さみさと小学校の四杉貴美先生、あさひ野小学校の目澤恵子先生、そして朝日中学校の楽山 進先生の3名の研究主任の先生方、ありがとうございました。



朝日町合同調査委員会の活動から



郷土教育教材開発研究調査委員会

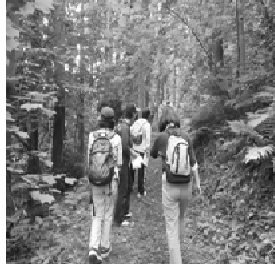
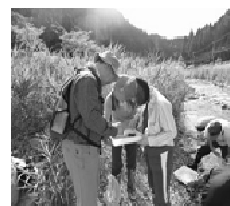
☆成果☆

- 現地学習会（8/8）の企画と実施
- 「舟川新の耕地整理」を郷土教材として再取材
- 「わたしたちの朝日町」の校正、発刊
- 「郷土教材ファイル」を作成、小学校に配付



★課題★

- 郷土教材を利用した授業実践の減少
- 郷土の歴史、文化、自然等への教員の体験減少
- 郷土教材資料等、これまでの制作物の利用
- 「舟川新の耕地整理」の教材普及、授業実践



◇◇郷土教育教材開発研究調査員◇◇

- | | |
|---------|-------------|
| さみさと小学校 | 大菅 和世 (委員長) |
| さみさと小学校 | 梨木 宏子 |
| さみさと小学校 | 梅津 陽 |
| あさひ野小学校 | 吉本裕佳里 |
| 朝日中学校 | 谷口正浩 |



情報教育研究調査委員会

☆成果☆

- 情報教育研修会①（ICT活用）の実施
- 情報教育研修会②（電子黒板等）の実施
- SNSについての調査・研究
- 生徒指導研修会との合同研修会の実施

★課題★

- 映像編集等二ーズの多い研修への対応
- デジタル黒板等を活用した授業研究
- SNSについての教員研修の企画と実施



◇◇ 情報教育研究調査員 ◇◇

- | | |
|---------|-------------|
| あさひ野小学校 | 水島 祐司 (委員長) |
| さみさと小学校 | 兵庫 秀典 |
| さみさと小学校 | 荒木 淳平 |
| あさひ野小学校 | 長谷川早苗 |
| 朝日中学校 | 宮野 哲章 |
| 朝日中学校 | 山田 智徳 |



センターの本棚(後編)

詳しくは、センターのwebサイト
(ホームページ)をご覧ください。

『どの子の信頼も勝ち取る！まずは人気の先生になろう！ —新卒3年目までの最強クラスづくり—』千葉県 飯村友和 先生



●飯村 友和 (いいむら ともかず) 1977年千葉県生まれ。八千代市立萱田南小学校勤務。教員11年目。教育サークル「明日の学級づくりを語る会」代表。全国各地で、模擬授業や学級づくりの講座を披露している。この先生のすごさは行動力。本を読んだら、著者に連絡する、会いに行く。教え子の発表会は全て見に行く等。本気で学べば、新卒3年目で大人気の先生になれるというのも、これだけ努力すれば…、当然かもしれません。

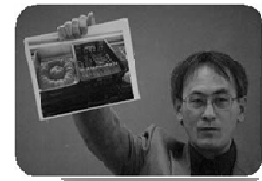


フジテレビ「アカン警察」で実践が取りあげられ、ダウンタウンを笑わせたほどの笑いの達人。新採3年目でも、こんな教室ができる。

『子ども集団を動かす魔法のワザ!』東京都 杉渕鐵良 先生



●困っていたクラスがまとまる！元気になる！子どもの全力を引き出す、カリスマ教師の指導のワザ満載。音読も計算も、合唱も絵の指導も、一段高みに子どもを鍛え、育てる、まさに「教育の鉄人!」。全国で実施の人気の講座は、常に満席。



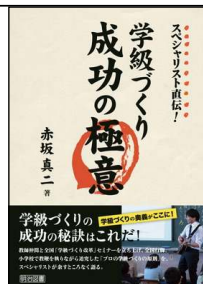
★来夏の「朝日町学力向上プログラム研修会(7/30)」に「杉渕鐵良先生」が登壇予定！鉄人と言われる指導と、まるで漫才とも言われる話法に、さみさと小学校で会えます！

平成25年度 朝日町小中教育講演会 予定講師

赤坂真二 先生の本 上越教育大学大学院准教授



●19年間の公立学校勤務を経て、2008年から上越教育大学院准教授。読めば納得の本、笑い感動に包まれる講演は大人気で、日本中から講演と飛び込み授業の依頼が殺到。6月朝日町来町予定!



<p>若手カリスマ教師「金大竜」 待望の2冊目登場！</p>	<p>読みやすい名著。杉渕鐵 良先生のワザが満載。</p>	<p>菊池省三先生。話し合い の指導ステップの秘密。</p>	<p>赤坂先生最新刊！明治 図書ランキング1位獲得。</p>
			

<p>渡邊尚久先生の名著 が入りました！一読を。</p>	<p>若手教員集団執筆で話 題の1冊。マネジメント！</p>	<p>夏に富山に来てくださった道徳 のチカラ代表の佐藤幸司先生。</p>	<p>現教育界最強のベストセ ラー教師 堀祐嗣先生。</p>
			

一斉授業からファシリテーションまで
新しく、あるいは古い授業を映像で！

学年末休業に、新年度のエネルギー充電と学
級づくり、授業づくりの準備にいかがですか？

★★「明日の教室」DVDシリーズ★★

- ①赤坂真二 『勇気づけの学級づくり～つながる道筋～』（上越教育大学大学院）
- ②土作 彰 『ミニネタを活用した模擬授業&土作学級づくり』（奈良県広陵西小）
- ③石川 晋 『学級担任が行う合唱指導「旅立ちの日に」&オムニバス型国語授業』（北海道土幌中学校/メールマガジン「学びのしかけプロジェクト」編集長）
- ④石川晋、堀祐嗣、門島伸佳（門島氏は、富山県西部の中学校の先生）
『文学の授業～読む・解く・書く～』
- ⑤菊池省三 『対話活動を大切にしたい授業づくり』（北九州市貴船小学校）
- ⑥ファシリテーショングラフィック入門 藤原友和（函館市昭和小学校）
- ⑦ファシリテーション入門 岡山洋一（SDI 札幌ディベート研究所）
- ⑧岩下 修 『発見がなければ授業じゃない』（立命館小学校 教諭）new!
- ⑨野中信行 『1学期のまとめと立て直し』（横浜市初任者指導教員）new!
- ⑩中川 綾 『職員室と教室のチーム・ビルディング』（アソビ代表取締役）new!
- ⑪杉渕鐵良 『学級を楽級へ、学習を楽習へ』（東京都公立小学校教諭）new!

明日の
教室

ポータブルDVDプレイヤー
も貸し出しています。車載
用電源アダプター付き。



平成24年度朝日町教育センター運営委員等（◎は委員長）

ありがとうございました。

◆朝日町教育センター運営委員◆

校長会 代表 村田 博史
 小教研 代表 林 清唯
 教頭会 代表 林 真也
 教務主任会 代表 林 和子

◆朝日町学校教育運営研修会企画運営委員◆

◎澤木 昇 ○山岸恵津子
 ○大森 敦 ○林 和子

◆外国語活動推進委員◆

○土居幸子 ○長谷川早苗 ○水島真寿美

◆郷土教育教材
開発研究調査員

◎大菅和世
 ○梨木宏子
 ○谷口正浩
 ○吉本裕佳里
 ○梅津 陽

◆情報教育研究
調査員

◎水島祐司
 ○長谷川早苗
 ○兵庫秀典
 ○宮野哲章
 ○山田智徳
 ○荒木淳平

◆朝日町小中学校児童生徒作品展実行委員◆

◎澤木 昇 ○森田隆司 ○石浦嘉寛
 ○大森祐子 ○兵庫秀典

◆朝日町学力向上推進委員◆

◎林 真也
 ○林 清唯 ○森田隆司 ○石浦嘉寛
 ○田中久美子 ○土井美雪 ○伊藤美静
 ○目澤恵子 ○横山亜希子 ○山田智徳

センターHPのご案内

- ・ 新刊や授業研究DVDを紹介しています。お届けも可能ですので、メール、電話でご連絡ください。
- ・ 研究校の研修会、民間の教育団体主催研修会もご案内いたしております。現在、学年末休業期間の研修を案内中。
- ・ 過去の「センターだより」を少しずつ掲載しています。あの先生の文章が読めます。センター発行済のリーフレット等もあります。

編集後記

『ハチドリの一としく（南米エクアドルの伝記）』より

恐ろしい山火事がありました。
 森の動物たちは、みんな必死に逃げましたが、一羽のハチドリが一生懸命、細いクチバシを使って川から水を運び一滴一滴を燃え盛る火に落とっていました。
 逃げてきたクマがそれを見て立ち止まりました。
 「おまえは、いったい何をしているんだ！」
 ハチドリは、答えました。
 「できることをやっているのさ！」

山火事続きで、教育現場を取り巻く課題はますます複雑化しているようです。そんな中、町教育センターがはたして「できることをやれたか」は不安ですが、まもなく1年が終わろうとしています。センター事業へのご協力と温かいご支援をいただき、本当にありがとうございました。
 町内の小中学生とともに、長く職務、教育、保育に心血を注いでこられた先輩方の「卒業」も近づいてきました。小さなひととしくでも、みんなの「私にできること」が集まれば、大きな力になる。いつもそう教え、教えられてきたように思います。皆様のご健康をお祈りいたします。
 さあ、冬が終わりますよ。

発行：朝日町教育センター

〒939-0743

富山県下新川郡朝日町道下1053番地 1

TEL/FAX 0765-83-0279

E-Mail asahi-ec@tym.ed.jp

ウェブサイト http://www.asahi-c.tym.ed.jp/

●●朝日町教育センター職員●●

所 長 永 井 孝 之
 （朝日町教育長）

所長 代理 澤 木 昇
 （さみさと小学校校長）

所 員 内 山 真 之
 助 手 大 菅 栄 子